

進路指導の際に解いておきたい英語の誤解

中西 のりこ

1. はじめに

文部科学省による「学校基本調査」を元に計算してみると、2018年度大学入試で「外国語」「英語」「言語」という語がつく学部を志望した受験生は10万人を超えていました(文部科学省, 2018a)。オープンキャンパスなどで高校生と話をしても「大学で語学を専攻して学びたい」という頼もしい声をよく聞きます。一方、このような高校生が持つ英語に対するイメージの中には、誤解や思い込みによるものが含まれているように感じることがあります。誤解による期待が「大学1年生ギャップ」につながらないよう、教員側も指導の際に気をつけたいものです。以下では、大学入学前の高校生がよく口にするフレーズを3つ紹介し、その中に含まれる誤解の種類について論じます。

2. 英語が好き

「英語が好き」と言う生徒から少し詳しく話を聞くと、「英語でのコミュニケーションが好き」「洋画や洋楽が好き」「英語という科目が好き」という3つのタイプに分かれるようです。

ひとつ目のタイプの生徒は英語を情報伝達のツールとして認識しており、言語本来の機能を理解しているように見えます。このツールを使って自分の世界を広げていくことに意欲的ならば頼もしいのですが、これまでにどんな情報のやり取りをしたから英語を好きになったのかという点で不安が残ります。例えば授業でのゲームが楽しかったから英語が好きという生徒は、ゲームの中でどんな情報を伝達したのか、その情報が自分やコミュニケーションの相手にとってどういう意味を持つのかというコンテンツの部分にも興味を持っているのでしょうか。授業を計画する際には、英語でやり取りができたという達成感ばかりに目を奪われるのではなく、肝心の伝達内容が生徒の知的好奇心を刺激し得るかという観点も

大切にしたいものです。

次に、「洋画や洋楽が好き」というタイプの生徒は、学校教育で得た知識を自分自身の趣味と結び付けて捉え、現実の世界で活かしています。海外の珍しいもの、かっこいいものを取り入れるために言語が役立つということを楽しみながら実感している様子が伺われます。しかし、言語活動が洋画を観る・洋楽を聴くというインプット面に限られていることが残念に感じられます。文明開化の時代ならいざ知らず、グローバル社会を生きる若者が西洋の文化を取り入れるばかりで自分からは何も伝えないのはもったいないということも同時に実感できるよう、アウトプットの楽しさも伝えたいものです。例えば、好きな映画スターやミュージシャンが開設しているSNSサイトがあれば信用できるサイトか確認した上で自分もそこに投稿してみるとか、好きな洋楽をカラオケで歌えるよう発音練習をしてみるとか、趣味を発信活動につなげる方法はいくらかでも見つけられるはずです。

最後の「英語という科目が好き」というグループの中には、単語を暗記し文法のしくみを覚えれば得点を稼ぎやすい科目として英語を捉えている生徒が目立ちます。大学入試も含めたテストというゲームで重宝するコマのようなものです。日本で初めてNHKラジオ英語講座を担当した岡倉由三郎は昭和初期に執筆した著書の中で受験英語について触れ、「受験英語は実用の英語である。これは貨幣のやうなものであるから、十圓持つてゆかなければ學校へ入れないといへば、仕方がない、十圓貯蓄してやらなければならない。その爲に教養の方面が邪魔をされるのは致し方ないが、とにかく役に立つのであるから、大いにやつてよらしい(岡倉, 1936: 30)」と述べています。一方で岡倉は、英語の知識を授ける実用重視の「英語教授」よりも、英語を通じて行う教養としての「英語教育」の価値を訴えています。

英語という外国語を通して客観的な視点で自国文化と外国文化を捉える力を養うのが英語教師の使命であるという彼の主張は、80年以上経った今でも色あせていません。現代でも変わらず受験のための暗記にいそしむ生徒を前にして、「単に英語を教へる機械に過ぎないやうな教師(同:35)」に甘んじていないか、反省させられます。例えば「テスト攻略はバッチリ」という安心感を与えたい衝動に駆られ「can=be able to, will=be going to」のような公式じみたものを、コンテクストを無視して提示していないでしょうか。教科書本文に出ている分詞構文に飛びついて、なぜそこで分詞構文が使われているのか考える余裕を生徒に与えないまま、文法説明と書き換え練習に高じていないでしょうか。

3. 英語は将来つぶしがきく

8-9割の高校生・保護者が、進路選択の際に「役に立つ資格」「収入や雇用が安定している仕事」「手に職」を得ることができるかどうかを考えると回答しています(一般社団法人全国高等学校PTA連合会・(株)リクルートマーケティングパートナーズ調べ:25-26)。さらに、学校や塾の先生から「英語は将来つぶしがきく」と言われたから語学系の学部を志望したという声も、受験生や保護者から聞こえてきます。

はじめに、「役に立つ資格」といえば英語の資格・検定試験が昨今特に注目を集めています。「大学入試英語成績提供システム」に参加予定の資格・検定試験のうちの1つである実用英語技能検定は、本来「英語圏における社会生活に必要な英語」として実用的であるという意味で命名されたものと考えられますが、受験英語としても実用的になったことは皮肉なものです。しかし、たとえそれが入試や資格・検定試験対策のためであったとしても、本誌87号で小泉が勧めるように、実際に伸ばしたい英語力と資格・検定試験で測られる英語力のギャップを埋める工夫は可能です。試験の得点稼ぎと同時に、グローバル化社会の未来を担う若者が「何ができるようになっていけばよいか」という視点(中西, 2019)からの声掛けをしておけば、試験で目標の得点に達した後も、身につけた能力を現実の社会生活で役に立てられるはずです。

次に、「収入や雇用が安定している仕事」に就く

ために英語が必要という指導の短絡さについても再考する必要があります。例えば筆者が所属する大学では、清掃会社や警備会社から派遣された清掃員や警備員が学内の衛生や安全を守っており、日本語が得意でない教員が掲示を見過ごしたり誤解したりしているときには、英語での説明を交えながらゴミの捨て方を実演したりバスの通り道を横切らないようジェスチャーで示したりして、対応してくれています。彼らは仕事で英語を使っていますが、それが収入や雇用の安定に直結しているか定かではありません。つまり、英語が使えるから将来の仕事が安泰なのではなく、英語は、どんな職業に就いていても使う人は使う、使わない人は使わないというツールではありません。持っていれば役立つ上に邪魔にもならないので身につけるに越したことはありませんが、「英語ができないと安定した仕事に就けない」と高校生を脅したり「英語さえできれば安定した仕事に就ける」と誤解を与えたりしないよう注意が必要です。

最後の「手に職をつける」という目標は、まさにその通り、高校生が自分自身の特性や理想を考慮した上で、将来の見通しを立ててもらいたいものです。ここで気をつけたいのは「英語を使う仕事に就きたい」という目標です。英語という言語を直接的に分析したり教えたりする研究者や教員以外にも、英語をツールとして使う職業は数多くあり、選択の幅が広すぎるため「仕事で英語を使う」という目標を立てただけでは職業選択をしたことになりません。例えば、文字を美しい形で書くことができる人がその特性を生かして「文字を書く仕事に就きたい」と考えたとしましょう。お習字の先生のようにそれを直接教える仕事以外にも、職場での伝言メモ、簡単な業務記録、書類へのサインなど、文字を書く業務は多種多様にあります。英語も同様で、社会生活のさまざまな場面で使うことになったとしても、それ自体が職業にはなり得ません。「手に職をつける」というのは、仕事に必要な道具を揃えることではなく、その道具を使って報酬を得るに値する何かができるということです。英語というツールさえあれば「つぶしがきく」のではなく、そのツールを使った職の中身に注目するようアドバイスするのが進路指導の醍醐味です。

4. 日常会話ぐらいは英語で

高校3年生を対象とした「英語力調査」の結果によると、「身に付けたい英語力」として与えられた7つの選択肢のうち「海外旅行などをするとき、英語で日常的な会話をし、コミュニケーションを楽しめるようになりたい(34.9%)」という回答が最も多く選ばれ、「大学入試に対応できる力を付けたい(19.5%)」「特に学校の授業以外での利用を考えていない(18.0%)」に次いで、「英語を使って、国際社会で活躍できるようになりたい(12.4%)」が選ばれました(文部科学省, 2018b)。ここでは、これらの選択肢が招く恐れがある誤解について考えましょう。

まず、高校生の3人に1人が選んだ「海外旅行などでの日常的な会話」という状況ですが、海外旅行という非日常の経験の中で、どのような日常会話を想定しているのでしょうか。旅先で駅員に切符の買い方を尋ねたり飲食店で料理を注文したりするときに使われる英語は、情報伝達の目的や範囲、相手と自分の立場が特定された「特定の目的のための英語(ESP, English for Specific Purposes)」です。使用される用語や形式が限定的なので教えやすいですが、日常会話となると、会話のトピック、目的や範囲、話し手と聞き手の属性や立場の組み合わせが無限に広がるので、バラエティに富んだ話題に柔軟に対応できる英語力が必要とされます。日常会話レベルの英語力を身につけるためには、教科書の範疇を越えた語彙や文法・発音にも柔軟に対応できるインプットの質と量と同時に、知らない話題に遭遇したときにパニックにならない大らかさと度胸が求められます。文部科学省は「各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」(文部科学省, 2017:22)」を推進しようとしていますから、単に旅行先で切符の買い方を尋ねるといったロールプレイングのような授業活動を日常英会話の練習とは見なしていないはずです。文部科学省が「英語力調査」で海外旅行と日常会話というチグハグな場面設定を提示したことにより、教員や生徒が「形式的に対話型を取り入れた授業や特定の指導の型を目指した技術の改善(文部科学省, 2016:26)」で満足してしまわないよう願うばかり

です。

次に「英語で日常的な会話」という部分についてもう少し深く考えてみましょう。「日常会話ぐらいは英語で」とよく聞きますが、果たして私たちは学校教育の中で日常会話に対応できるほど豊かな英語を教えることができていますでしょうか。日常の話し言葉を取り上げた教材 *Exploring Spoken English* は実際の話し言葉コーパス CANCODE を元にしていますが、自然な会話を提示することが困難であるということを教材の冒頭で断っています(Carter & McCarthy, 1997:7-8, 11)。私たちが学校教育の中で使用している音声教材も、学習上の配慮から語彙・文法の統制や雑音除去等の調整を行っているため、時に不自然なものとなり得ます。教育という目標に沿って作られたものである限り仕方がないことですから、日常会話レベルの英語力を目指すなら、適宜オーセンティックな素材を用いて授業活動を補う必要があります。冒頭で紹介した「英語力調査」の結果、「大学入試に対応できる力を付けたい」もしくは「特に学校の授業以外での利用を考えていない」という選択肢を選んだ生徒が実に4割弱を占めたことは、現状の学校教育の中で身につけた英語は現実の社会生活で使われる英語とは別のものであるということを高校生がちゃんと察していることの表れとも解釈できます。

さらに「英語力調査」の選択肢に戻って、今度は「コミュニケーションを楽しめるようになりたい」という部分に注目しましょう。この選択肢は「海外旅行などをするとき」という場面設定と合わせて提示されたものです。先ほど示した例のように駅員や飲食店の店員など観光業に従事している人たちは、旅行者を相手に接客をしているだけであって、接客される側が「英語が通じた」という喜びを感じたとしても、その状態を「コミュニケーションを楽しむ」と呼べるのか、疑問が残ります。“I enjoyed the conversation with...”という状況は、コミュニケーションの双方が共通の話題に興味を持った上で、やり取りの意義を感じてはじめて成り立つものです。旅先でこのようなやり取りをする相手を見つけるには、フレンドリーに話しかけてくる相手が詐欺師や薬物ディーラーかどうか判断する力が求められますし、逆に自分から人に話しかけた時に「怪しい人」と思われたいような話し方を身につけなければ

ばなりません。「海外旅行中にコミュニケーションを楽しむ」という選択肢を設けるのであれば、海外での犯罪被害についての危機管理教育のあり方を早急に見直すべきです。旅先で知り合った人と安全にコミュニケーションを楽しむという難題を突きつけられてもおかしいと感じない高校生を育ててしまった責任は、このような選択肢を作った側にあります。

最後に「英語を使って、国際社会で活躍できるようにになりたい」という選択肢については、前述の「英語を使う仕事に就きたい」という目標と同様の違和感を覚えます。スポーツ選手・芸術家・科学者・活動家など国際社会で活躍している人は多くいますが、英語を使っているから活躍できるのではなく、それぞれの分野において国外で認められる能力を発揮できているからおのずと英語を使うことになるという順序のはずです。文部科学省がこの選択肢を作成したときにどのような議論があったのかは不明ですが、教育現場でも同様の誤解を招くような指導をしていないでしょうか。

5. おわりに

筆者が所属しているグローバル・コミュニケーション学部には多くの新入生が「英語が好き」「英語は将来つぶしがきく」「日常会話ぐらいは英語で」という理由で入学してきますが、ごく単純なやり取りを身構えずにできるようになるまでに数ヶ月かかる学生がいます。まるで入学後しばらく経ってやっと、英語という言語が情報伝達機能を備えていることに気づくかのようなようです。高校の教育現場では受験や資格試験で高得点を取るための英語指導に重点を置かざるを得ないのが現状ですが、高得点を取るトレーニングを積んだ学習者が必ずしもその力を社会生活で活かせるわけでもないようです。逆に、入学時の英語試験スコアが低くても、英語という言語が社会生活で使われる言葉のひとつであるということから理解して学内外での活動で使っている学生は、異文化間理解の葛藤や社会問題など多くの気づきを得ながら、その副産物として飛躍的な英語力の伸びを見せてくれます。

このことに関連して、新入生と話をしている気になることは「正しい英語」へのこだわりの強さです。

これは、受験英語・資格試験英語で「正しい」とされる言葉を身につけなければならなかったことの副作用であると考えられます。「間違いを恐れて話せない・書けない」という問題は比較的早く解決できるのですが、根強いのが、非標準とされる英語発音を馬鹿にするような姿勢です。学校教育の中で発音指導をする際の教員の態度が映し出されているのではないかと気になります。将来、望みどおり「英語を使う仕事」に就くとして、英語を使ってコミュニケーションをとる相手は世界のさまざまな地域の言語を母語とした英語話者ですから、それぞれの母語の影響を受けた英語でやり取りをすることになります。英語発音が標準的かどうかということに惑わされて、やり取りの内容や相手への思いやりがお留守になるようではグローバル人材失格です。言語の正しさはコンテキストによりますし、英語はコミュニケーションツールのひとつに過ぎません。ツールの見栄えではなく、ツールを使って何ができるかを考えるのが、私たちに求められる進路指導のあり方です。

参考文献

- Carter, R., & McCarthy, M. (1997). *Exploring Spoken English*. Cambridge University Press.
- 小泉利恵(2018)。「自己評価・相互評価を取り入れたスピーキング指導」『CHART NETWORK』87号, 9-12. 数研出版.
- 文部科学省(2016)。「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」
- 文部科学省(2017)。「新しい学習指導要領の考え方」
- 文部科学省(2018a)。「学校基本調査」
- 文部科学省(2018b)。「平成29年度英語教育改善のための英語力調査 事業報告」
- 中西のりこ(2019)。「グローバル・コミュニケーションのための英語4技能と音声指導」『英語教育』2019年1月号, 66-67. 大修館書店.
- 岡倉由三郎(1936)。「英語教育の目的と価値」研究社.
- 全国高等学校 PTA 連合会・リクルート(2018)。「第8回高校生と保護者の進路に関する意識調査」

(神戸学院大学 教授)